

# 生態人類学会ニュースレター

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

2002年3月23日発行

## 特集 伊谷純一郎氏 追悼

### 弔 辞

新しい世紀を迎えた年に、伊谷先生は逝ってしまわれた。先生とともに生態人類学の旗印を掲げて歩んできた者の一人として、その喪失感は深く重い。そして、一つの時代が終わったと痛切に思うのである。

私は、京都大学に入学した1963年の冬に、初めて伊谷先生の話聞いた。京都大学アフリカ研究会の例会で、先生はカヨンザの森に住むピグミー（バトゥワ）の物質文化について、慈愛と茶目っ気の入り混じったような表情で楽しそうに語られた。ピグミーの心が乗り移ったような語り口だな、と思った印象が強く残っている。偶然にポスターで知り、例会に参加したのだが、今から思えば、この出会いから「全て」が始まったように思う。

私は工学部の電気工学科に入学した。しかし、アフリカで暮らし調査することを強く願うようになり、留年して思い悩む日々を過ごし、伊谷先生に相談した。そして、理学部の植物学科への転学部を経て、1968年に動物学専攻の大学院に進学し、自然人類学研究室の伊谷先生のもとで学ぶことになった。

「掛谷、そろそろ人間のエコロジーをやらんか」という先生の誘いにひかれ、よく分からないままに、しかし何だか面白そうだという思いに導かれて、トカラ列島の悪石島・平島でのフィールドワークを始めた。平島に滞在しているとき、「われらが大学は重大な危機を迎えている。ただちに帰学せよ。」といった内容の電報が伊谷先生から届いた。「大学闘争」「全共闘」の時代に、私たちは生態人類学の道を模索していたのである。学生部委員として伊谷先生は、デモ隊の後を追わねばならない時期もあった。疲れて研究室に戻ってこられるのだが、時に原野でチンパン

ジーを追跡する感覚を思いだしておられるように見えたこともあった。そんな時期を経て、1971年に伊谷先生とともに、私はタンガニーカ湖の東岸域に住むトングウェの地に赴いた。

このトングウェ調査を契機として、伊谷先生は本格的な生態人類学の調査に踏み込まれた。翌年の1972年には、原子さんとともにイトウリの森のピグミー研究を始められた。1978年にはトゥルカナの調査に入り、「もうこれで死ぬのかとさえ思った」という過酷なサファリも体験しながら、トゥルカナに惚れきってしまわれた。このような伊谷先生の研究の軌跡は、もちろん人間社会の形成の復元という課題に沿ったものであった。しかし伊谷流の生態人類学は、アフリカの自然と人々との直接的な触れ合いを源泉としつつ、大きな時代のうねりを心の底で受け止め、しなやかな直感と洞察力、そして独特の美学によって研究の対象と目的を見出し、築き上げられてきたのである。

今、時代は混迷の只中にあり、大学も危機的な状況を迎えている。時代のパラダイムが大きく揺れる中で、生態人類学もまた、その根拠と進むべき道について問い直す必要があろう。さまざまな困難に遭遇したとき、伊谷先生の教えを受けた多くの者たちは、「先生なら、どのように対処されるだろうか」と考え、解決の糸口を求めたことが、しばしばあったにちがいない。

伊谷流の生態人類学の真髓に思いを馳せつつ、先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

掛谷 誠

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

## 記事

### 伊谷先生の思い出

秋道 智彌  
国立民族学博物館

アフリカ、サル学、狩猟採集民、牧畜。これらのキーワードからおよそ縁遠い道を歩んできた自分を振り返ると、伊谷先生との思い出は他のアフリカニストに比べて当然少ないといわざるをえない。それでも学部時代に聞いた講義や皆と一緒に歩いた北山でのフィールドワーク実践方法、アマゴのつかみ取り伝授。素っ裸で宿屋の廊下を駆け抜けた先生のはやわぎ、近くは数年前、葉山での講義（総合研究大学院大学）での語らい。思い出がつぎつぎと駆け巡る。

動物学教室の学生であった私は元々、入学時にはバケ学を目指していた。しかし、大学紛争直後でもあり、実験の毎日には決定的な物足りなさを感じていた。バケ学から、生物学へ、免疫学、生態学へとなだれ的に横滑り。最後は自然人類学教室にいつしか駆け込んでいた。卒業論文は北山のイノシシ猟。そのままアフリカへという思いがあったのだが、夢が遠のいていった。その訳は、東大の人類学教室へ進学したことに尽きる。いまから思えば、アフリカ行きに執着していればどうなっていたらうか。同年代の市川光雄、佐藤俊、黒田末寿、松井健、山田孝子などの活躍をみるにつけ、いろいろと考えてしまう。京大にのこらないことを伊谷先生に告げた時、部屋にたまたま伊谷夫人がおられた。「なんであなた東京へ行くの」。あきれたような奥様の反応に、返す言葉もなかった。

東京行きを決めた訳は、私にとり意外と単純で、二つ理由があった。ひとつは、地獄谷（長野県）のニホンザルが柿の実を食べるが、やらないかと伊谷さんからいわれてピンとこなかった。つまり、ニホンザルの行動を調べる意味を自分でつかんではいなかった。狩猟をやりたいので、サルはどうもと考えていたわけだ。

もう一つは、仲間と霊長類研究所へ行った時のことである。そのおりに、大平山を訪れた。餌づけされた公園のニホンザルを観察するためである。サルのいる場で係員の人がサツマイモをばらまいた。柵に腰かけて観察開始。人気を感じて右後ろを振り向いたとき、1頭のサルと眼があってしまった。と思ったときは遅かった。思い切り右腕に噛みつかれた。係員の人が竹ぼうきで追っ払ってくれて事なきをえた。冬場で厚着をしていたので皮膚まで噛みあととはのこらなかったが、ジャンパーには立

派な犬歯あとが残った。これでサル嫌いは決定的となった。まだ、魚のほうがおもしろそうだと考えていた。

それでも、狩猟をやりたい気持ちは持続していた。生態人類学分野でアフリカに行くことなく何をを目指すのか。東大に移って多くの刺激をうけ、結局、海の狩猟者である漁民をフィールドに選んだ。日本、オセアニア、インドネシアと歩いて30年。そして、最近では東南アジアの山へと関心は動いた。中国では、森の狩猟者にも巡り会えた。自然、進化、人間。いまもなお、伊谷先生は私のなかに生き続けている。ありがとうございました。

### あとは君たちの番だ

伊谷先生にいただいた希望

安溪 貴子  
山口大学非常勤講師

伊谷先生が亡くなられたという知らせを聞いたのは、アフリカから招いた友人たちとともに屋久島へ向かう旅の途中だった。ご病状が篤いことは知らされていたのだが、大きな衝撃をうけた。ひとり家の前の浜辺に出、はだしで渚を歩いた。おだやかな海のむこうに桜島がぼんやりと浮かんで、海をわたってくる風がからだをなでていく。くだけた波が砂とともに足もとをくすぐる……。なぜか先生がすぐ近くにいらっしやるような気がした。

台風で鹿児島に足留めされた旅の道連れは、4人のアフリカの人たちと山極寿一さん。内戦と貧困という想像を絶するような困難の中で、大地にしがみつこうにして、森を、自然を守る努力を地道に続けてきた仲間だ。これらの人たちとともに過ごしている折りに、先生の逝ってしまわれる時を迎えた。夫と二人だけだったら、途方にくれていただろう。みんなでなら先生のメッセージを受け止めることができるのでは、と思った。

君たちが行く所は一か所しかない。そこはアフリカの緑の心臓だよ。飛行機から見たら美しい森が広がっていた。美しい森には、今も伝統が生きていて、美しい暮らしがあることだろう……。1978年の6月、初めて海外に旅立つ夫と私に、研究室のアフリカの大地図を前にした伊谷先生はこうおっしゃった。先生の目に狂いはなく、ザイルの人と大地は、私たちの生き方をゆさぶり、根元から変えてくれた。1年余りの滞在だったが、あの時から私の中にはアフリカが住みついてしまった。

屋久島では全国の若者と地元の高校生とともに屋久島フィールドワーク講座が始まっていた。参加する若者た

ちの目がきらきらしている。屋久島のもつ力と地元の方々のおかげだろう。研究させていただいたお返しを頼う屋久島研究者が講師となって伝えるフィールドワークの魅力も大きい。フィールドワークは辛いことも多いのに、講座が終わるころにはひとりひとりがはじけ、表情も輝いてくる。こんな場に参加できてうれしい。そしてここに至るレールを引いてくださったのは伊谷先生なんだ、とつい思ってしまう。

「僕は、ここまでやってきたんだが、あとは君たちの番だ。頼んだよ。」—これが、錦江湾に立つ私を感じとった、先生からのメッセージだったのだ。伊谷先生、先生が「アグレッシブな」学問と後進のための研究拠点の建設に挑み続けながら、肩で風を切って前のめりに歩んで来られた道はとぎれることはありません。皆でしっかりうけとめて、次の世代、新しい千年紀へ希望を手渡していきます。日本にもアフリカにも世界の各地にいる、伊谷先生がつかないでくださったたくさんの人々、友、仲間とともに。

---

## 西表島での伊谷純一郎先生語録

安溪 遊地  
山口県立大学教員

私にとっての初めてのフィールド・西表島に伊谷純一郎先生は3たび付きそってくださった。教育者としての伊谷先生のユニークとしかいいようのない魅力については、安溪貴子との対談の形でやや詳しく述べたが(安溪遊地・安溪貴子、2000『島からのことづて—琉球弧聞き書きの旅』葦書房)、ここでは、先生の西表島でのことばを書きとめて、われらが師匠の随聞記の一部としたい。

「君の行くところは—か所しかない。」1974年4月。右も左も分からない大学院生だった私に、この断固たる言葉で伊谷先生は西表島の廃村・鹿川(かのかわ)での調査を指示された。そして、さっそく6月には、原子令三さんとともに現地へ同行してくださった。廃村でのダニのかゆさは、先生をのちのちまで苦しめることになるのだが、「安上がりの熱帯はつらいなあ」とこぼしておられた。

「目覚まし時計までもって来たんか!? まるで百貨店やないか!」廃村で迎えた朝、浜辺に張ったテントの中で叱られた。軽いズック靴にイスラーム帽、帆布のサブザックを背に、手には厚鎌というのが、西表島での伊谷先生のスタイルの定番だった。私はといえば、無駄なものはいらぬと、廃村に降り立ってみたら、港に自分の靴

を脱いだまま忘れてきたことに気づいたというちぐはぐさだった。

「しょうもない無くし方すな!」—比較調査のため、鹿川村から歩いて3時間ほど先の崎山廃村に泊まった時、夕食をとりながら、私はノートをなくしたことに気づいた。慌てる私に先生は「俺もフィールドノートなくしたことがあって、その時は今西さんにものすごう叱られたわ。あれからいっぺんもなくしたことないけどな…」ところが、食事が終わらないうちに「あ、ありました」と報告したところで、慥然とした先生のこの言葉が出たのだった。

「さっき殺した蛇の首が君のズボンの裾に食らいついてるで!」と脅されたこともある。廃村の旧道を切りひらいている時に顔を出した西表一の太蛇サキシマスジオを思わず切り捨て、5分ほど歩いたあとのことであった。思わず飛び上がったが、何もついてははず、「喰わぬ殺生はするな」という先生の教えに気づいたのだった。

「ものすごう旨い。」—伊谷流では、おかずは基本的に自給である。しぶきのかかる岩場で採ったオオベッコウガサは、直火で軽く焼くと旨いのだが、先生は手ずから生の肝を勧めて下さった。喉の奥までいがらっぽくなって私はへきえきしたが、先生は「その余韻がものすごう旨いのやないか。」とおっしゃった。急斜面の藪の中での遺物探しを終えた私が、夕刻浜に戻ると、その日の食事係を引き受けてくださった伊谷先生は、誇り高いシェフの面持ちで、しずしずと鍋の蓋を取った。そこには、ハチジョウダカラガイとシャコがそれぞれ一匹ずつ鎮座していた。努力の結晶。文字通りのご馳走だった。いつでもどこでも、現場をとことん楽しみ、そこに豪華さを演出する伊谷先生の心意気と茶目っ気、忘れないようにしたい。

---

## ナイロビの伊谷さん

市川 光雄  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1976年、イトウリの森から帰って半年ほどしてから、私は日本学術振興会のナイロビ・オフィスにジュニア駐在員として赴任することになった。3月末に日本を発ち、翌日、私の到着便で離任する前任者とナイロビ空港で引き継ぎをした。免許をとりたてだったが、引き継いだ車を空港から運転してナイロビに向かい、前年にリバーサイド・ドライブに開設された新しいオフィスの住人とな

った。それから1ヵ月たった4月末に、シニアの駐在員として伊谷さんがやってきた。空港に迎えにゆくと、伊谷さんはきちんとした背広姿で、書きかけの原稿が詰まった重そうな鞆を抱えて現れた。そのまま私の運転で学振のオフィスに直行した。長旅でずいぶん疲れておいでのようにだったが、日本から持ってきたというたみいわしと日本酒でまずは乾杯。そこで、「これ、おもしろいぞ」と言いながらおもむろに取り出したのが、大橋保夫訳で出版されたばかりのレヴィ＝ストロースの『野生の思考』だった。伊谷さんから流行の構造人類学の本を薦められるなんて意外だったが、飛行機の中で読んできたという本にはカバーが裏返してかけてあり、伊谷さんのシャイな一面をみたような気がした。

それから10月までの約5ヵ月間を伊谷さんと一緒にナイロビで過ごした。といってもその間に伊谷さんはタンザニアやコンゴ(旧ザイール)などを忙しく廻っていたため、実質的に一緒だったのは3ヵ月くらいか。毎日、伊谷さんはナイロビで買った刺繍入りの布を腰に巻き、椅子に正座をして原稿を書いていた。のちに『チンパンジーの原野』としてまとめられた雑誌『アニマ』の連載原稿だったと思う。私は日がながいすに寝そべて旅行者がおいていった古い本や週刊誌を読んでいた。伊谷さんも執筆の合間に読んだのか、五味康祐や柴田練三郎の剣豪小説などについて、「俺にはとてもああいう風には書けない」と感心していたのを思い出す。昼になると、スパゲッティのうどん風料理を作って食べ、夕方はたっぷり時間をかけてカレーなどの煮込み料理を用意した。緑豆を買ってきてポイラー室でもやしを作ったこともある。酒はフランスワインのGrave、アペリチーフはNoily Pratで『ゴリラとピグミーの森』にも登場するやつである。そして夜が更けると、私の運転でスターライトやソンプレロなどに繰り出していった。ナイトクラブでの伊谷さんの会話は必ずスワヒリ語で、いつも同じ決まり文句で女性たちを喜ばせた。すくなくともご本人はそう信じていた。それは、「君の目はグラスのようで、おなかには板のよう、そしてお尻はカバのよう」というものだった。これが何で美人の形容になるのかわからなかったが、クラブの女性たちは伊谷さんがそう言うともみんな喜んでいて。日曜日には、小型のルノー6を駆ってナイバシャ湖やアバデア山に繰り出した。博物館やアーポレタム、ナイロビ国立公園には何度もご一緒し、伊谷さんの博識に接することができた。博物館が駆使されている『野生の思考』を面白いと言ったのもよく理解できた。ナイロビの草競馬にも何回か行ったが、それがきっかけになったのか、学振オフィスの庭で馬を飼い、それに乗ってウェストランドまで買い物に行きたいと言いだしたのには困ってしまった。

ナイロビでの数ヵ月は、私の知るかぎりでは伊谷さんがいちばんゆっくりとできた時ではないかと思う。

---

## 伊谷先生と本の執筆

大塚 柳太郎

東京大学大学院医学系研究科人類生態学教室

伊谷先生(以後、伊谷さんと呼ばせていただきます)との最初の出会いがいつであったのか、なかなか思い出せない。多分、私が学部の3年か4年のとき、京大の自然人類学研究室に顔を出したときだったのであろう。それがいつであったかはわからないものの、『高崎山のサル』や『ゴリラとピグミーの森』の著者にぴったりと感じたことだけは覚えている。私自身は高校生ごろ、伊谷さんたちの活躍を多少は知っていて、京大にいきたいと思っていたときもあり、東大の人類学教室に進学してからは京大を訪問するのが楽しみであった。

伊谷さんの記憶が最初に鮮明に思い出されるのは、私が東大人類生態学教室の助手になっていた1973年、共立出版の編集部から、生態学講座の『人類の生態』を書いてほしいといわれたときである。そのとき私は28歳で、論文を3つほど書いたことはあるものの、およそ本などという大それたものを執筆するとは想像もしていなかった。人類生態学教室の当時助教授であった鈴木継美先生に相談すると、「書けばいいじゃない」とつれない返事であった。共立出版に、「なんで僕に書かせるなんていうことになったんですか」と尋ねると、しばらくして伊谷さんから電話がありこんこんと諭された。そのときではなく、多分しばらく後のことだったと思うが、伊谷さんから「君が引き受けなければいけない理由がある。本来は渡辺仁先生(私の大学院時代の恩師で故人)が執筆を引き受けていたのに、断ったからだ」といわれた。後日談をいえば、共立出版としては私はダメで、伊谷さんに書かせようと考えていたふしがあり、伊谷さんの説得術にはまったようである。

ともかく説得され、書くことを決意はしたものの、まったく見通しのきかない藪にはいったような感じで困り果てた。辛うじて、田中二郎さんと西田利貞さんから共著者になっていただく了解が得られ、安堵したのをよく覚えている。私がかつても心配していたのは、おなじ講座に美文で知られる伊谷さんが『霊長類の社会構造』を執筆することであった。しかし、さすがにこの本はきわめて科学的で美文という雰囲気のものではなく、ほっと

したことも覚えている。

その後、伊谷さんとは研究会やそのときの囲碁のお相手をはじめ、大変親しくしていただいていたが、1995年に東大出版会から『熱帯林の世界』というシリーズ本を出したい、その編集責任者を伊谷さんと私がやってほしいとの依頼を受けた。私としては、伊谷さんと一緒に本を編集できる期待感だけで、この話に乗ることにした。その後、伊谷さんとは京都あるいは東京で幾度となく会う機会をもった。本の企画に直接関係する話はほとんど覚えていないが、伊谷さんのアフリカでの経験談を聞くのはなんとも楽しみであった。このシリーズは、伊谷さん、私のほかに、加納隆至、口蔵幸雄、内堀基光、寺嶋秀明、木村秀雄の各氏を加え、7冊が出版された。

伊谷さんが執筆したのは『森林彷徨』である。実は、最初の原稿をみる機会があった私は、伊谷さんが最初のころからのアフリカ紀行のまとめをしているかのような印象を受けた。『森林彷徨』が遺書になるとは夢にも思っていなかったが、悲報を聞いて以来、ときにこの本をめくり、親しくしていただいたことに、深い感謝の念を抱きながら、伊谷さんのことを思い出している。

---

## 「フィールドを楽しみそれを教えた人」

伊谷純一郎先生を悼む

加納 隆至

伊谷先生は1962年に京都大学動物学科に新設された自然人類学研究室に、今西錦司教授の下で助教授として赴任された。以後私は高崎山からアフリカへと長くご指導をいただけることになった。運が良かったとしかいいようがない。当時タンザニアで調査を開始されて間もない頃で「サバンナ・チンパンジー」の生態解明に激しい熱意を燃やしておられた。カサカティ基地を発見されたときなど、先生の報告は血わき肉おどるものがあり、ゼミ室は異様な興奮に包まれたものだった。院生としての3年目にやっとアフリカに連れて行っていただいた。先生は、チンパンジーの追跡に「命をかける」といった感じだった。前日の夕、せっかくチンパンジーの群れを見つけておきながら寝過ごしてしまったときはきびしく叱責された。「お前などアフリカで調査する資格はない！」とまで言われた。のち私はザイル（現コンゴ民主共和国）でピグミーチンパンジーの調査を行うことになるのだが、そこでは毎日暗いうちから出かけて彼らの巢の下で目覚めを待つのが習慣となっていた。先生にあの時ど

やしつけられた記憶がいつのまにか私にそのような調査スタイルを取らせていたのだった。

調査のきびしさもさることながら、先生には「フィールドワークの楽しさ」をも教えていただいた。それは理屈抜きだった。煙草の煙をたなびかせながら風のように原野を歩き、巨ゾウの群れに驚喜し、瓜ん坊をつれたイボイノシシに目を細め、孤高の騎士のようにたたずむローンアンテロープを賞讃された。

突然遭遇したバファローの大群が、低い木に登って緊急避難された先生の足下を、かかとを舐めるほどの距離から見上げながら悠々と通過していった話、増水した川を首までつかって徒渉していたとき、猛毒の蛇ブームスラングが泳ぎ寄ってきて先生の首に巻きついた話、疲れはてて基地へ向かってよろめき歩いている先生のご一行に、ハゲタカの群れとハイエナの群れが最後までつけてきた話などなど、先生の体験談はいつも面白かったし、また実に楽しそうに話された。

当時はゴンベ動物保護区（現国立公園）のグドール博士に研究面で大きく水をあけられていた。そのような状況にあるのに、先生は「何か趣味を持って。チンパンジーしか目にはいらんようでは困る」とおっしゃった。ご自身もチョウを採集され、いくつかの新種・新亜種を発見なさっていたし、鳥や植物に対しても深い興味を示された。中でも地元住民であるトングエ族の生活や伝承への思い入れは並々ならぬものがあった。それがのちに京都大学アフリカ地域研究センターの設立へとつながっていったのだろうと、私は考えている。伊谷先生は、広い視野をもって自然に接し、大きなスケールでフィールドワークを楽しみ、それを教えることのできる希有的人だった。だからこそあれほど多くの若者たちが先生をしたって集まってきたのだろう。亡くなられて先生の存在がいかに大きかったかが改めて感じられる。心からご冥福をお祈り申し上げたい。

---

## 伊谷先生を偲ぶ

佐藤 俊

筑波大学歴史・人類学系

伊谷先生には、この30年余り恩を受けっぱなしであった。先生の訃報に接したとき、何か芯が抜けたかのような空虚感におそわれ、一晩中、グラスをかたむけ、先生とのそれまでの様々な交流の思い出にひたってしまった。理学部動物学教室では、先生に卒論の指導を受け、白

山麓白峰におけるクマ猟の論文を提出した。その際に、原型がとどまらないほど赤字で原稿を添削していただいた。学生としてほとんど先生の授業をサボっていた私にとって、本格的な指導はこのときが最初で最後だったように思う。というも、その後、私は霊長類研究所の大学院の第一期生として犬山市に下宿することになったからである。

霊研では、河合雅雄先生と田中二郎先生の指導をうけていたが、私はクマ猟師の研究を継続する希望をもって。これを聞いた伊谷先生から、一期生だからサルの研究を修論にするようにときつく叱られた。こうして、私は、白山山麓中宮のニホンザルを伊沢紘生先生（当時モンキーセンター）の指導をうけて研究することになった。

ところが、修論を提出した頃、伊沢さんと田中さんから、将来的にコロンビアのサルかアフリカの遊牧民のいずれを研究したいのか決断するように尋ねられた。これは、突然の話だったが、すぐに遊牧民の研究を希望した。後日談になるが、この提案は、私が人間の研究にも興味を持っていることに対して伊谷先生が気をつかってくれて、田中さんと相談して決めたらしいのである。

北ケニアの遊牧民レンディーレの長期調査も佳境に入った1976年に、伊谷先生は、短期間ながらナイロビの学振駐在員として市川光雄君と一緒に滞在された。私は、友人だけでなく伊谷先生もナイロビにいて非常に安心できた。先生は、研究の進め方の相談だけでなく、私の妻にも激励してくれ、結婚したばかりでレンディーレランドで生活するということによって生じた我々の緊張感をときほぐしてくれた。伊谷先生は、私の研究生活をなんらかのかたちで見守ってくれていたのである。

その後、私は東京の大学に就職したあと、つくばの大学に変わり、犬山から関東に移り住んでいる。そのために、日頃はほとんどお会いすることがなく、研究会でたまにお会いする程度であった。唯一、私は、京都の実家に帰省する正月に、先生のお宅を訪ねるのを楽しみにしていた。奥様や先生の手製の料理がおいしく、今でもカモ鍋やタンドリンチキンの味が舌に残っている。堀川ゴボウやメバルをはじめ食べたのもここである。残念ながら、先生宅では正月気分で鯨飲してしまうのが常なので、酒乱性健忘症のためにどのような話をしたかという事はほとんど記憶には残っていない。ただ、楽しかったことだけが思い出として残っている。

最後に先生と仕事上のかかわりをもったのは4年前である。先生は、放送大学の特別講義『HUMAN：人間・その起源を探る』を担当して、その中の講義にレンディーレを紹介することに決められた。その映像はアイオスが2年間かけて1999年に完成させたが、これは日本人によ

るレンディーレ映像の最初のものであり、我ながら映像とその製作者のすばらしさに感激したものである。しかし、友人から漏れ聞いたところでは、毒舌家の先生らしく、その中で私がいっていたズボンがミリタリールックで悪趣味の極みであるとのコメントをいただいた。

今年初めに先生から珍しく手紙が届いた。今となるとこれが先生からの最後の手紙となるが、私への痛風見舞いの後に、「戦争と科学万能の二十世紀が過ぎて清々した。」と書かれてあった。

心から、伊谷大先生のご冥福をお祈りいたします。

(2001.12.31 脱稿)

---

## 一生の宝

佐藤 弘明  
浜松医科大学

私は伊谷先生の直接の弟子ではなかったが、お目にかかって以来30数年密かに師と仰いできた。そう頻繁にお会いできなかったけれど思い出はささいなことばかりだが結構ある。大学4年か修士の時のアフリカに関する集中講義で初めて先生に間近に接することができた。そのとき先生が何を話されたかほとんど覚えていないが、講義中ショートホープをひっきりなしにプカプカやっていたのが鮮烈であった。先生のタバコについてはその他にも忘れがたい思い出がある。

1987年12月、コンゴ人民共和国での調査を終え、隣国ザイールの首都キンシャサで帰国までの時間を弘前大の丹野氏と過ごしていたとき、伊谷先生がワンパで倒れたとの急報が届いた。直ちに救援機を飛ばし、無事先生を救出する事ができた。当時のことについては先生自身が書かれているのでここでは触れないが、私が驚いたことは、キンシャサ・ンガリヤマ病院のICUに収容され、治療、検査などが行われていた最中ですら先生がタバコを手離さなかったことである。その後、パリのアメリカ病院に入院したときも、堂々と当然のごとくタバコを吸っていた。瀕死の床にありながらなお悠然（ンガリヤマ病院では看護婦さんの目を盗んでシケモクを吸っていたのご子息原一氏の証言はあるが）と紫煙をくゆらす伊谷先生はやっぱりすごい人だなと思った。

先生に博士論文の主査をお願いしたこともあって京大の自然人類研究室には時折出向いていたが、ほぼ毎回目にしたのは伊谷・三浦両先生の白熱の決戦であった。それはまことに血戦といってよく、組んずほぐれつ切った

張ったの連続であった。原子さんのそれとはまるで異なり、とても同じ囲碁を打っているとは思えなかった。それでもためになった。決して強い碁ではなかったが、さすがに伊谷先生、筋悪の模範例を示すことで見る者を指導したのである。先生は多くの弟子を育てられたが、その秘訣は先生の寛容とやさしさであったと思う。

いつだったか、先生が院生たちを前にして愛車を替えようかと思うと言った。誰かがどんな車にするつもりですかと聞くと、トヨタのマツダなんかはどうかと先生は尋ね返した。そのとたん、院生たちが「エエーッ、センスがない、あんなオッサンが乗るような車、〇〇屋の社長しか乗とらんで」等々いっせいに非難の声をあげた。私はそこまで言うかと思ったが、確かにそうやなとも思ったので黙っていた。その後、先生がトヨタ・マツダを買ったという話はいかに聞かなかった。

1997年、わずかな間だったが先生とフィールドを共にすることができた。カメルーンの熱帯雨林を歩き回るその軽やかな足取りはとても72歳の人のそれではなかった。小川では得意の手づかみ漁を披露してピグミーたちを驚かせ、おまけに、電気ナマズをつかんで皆を笑わせもした。そうしてあつという間にピグミーたちの心をつかんでしまった。見事なものであった。今にして思えば、フィールドでの先生のお姿を目の当たりにできた私は何と幸運であったことか。目に焼き付いているそのお姿を私の一生の宝としたい。

---

## 憧憬の伊谷先生

篠原 徹  
国立歴史民俗博物館

伊谷さんがなくなったとき、僕は海南島の山のなかを歩き回っていた。亜熱帯の森林のなかでヒルの襲撃に会い悪戦苦闘していた。8月19日は海南島では雨期の真っ最中であった。山の民リー族が使うトウニャウと呼ばれる竹の棒の先に布で塩をくるんだものを使えば、ヒルはいとも簡単に撃退できることをこのとき学んだ。住み込んだリー族の村から一時引き揚げ海南島の南西部の盆地の町・通什市に帰ってきて、伊谷さんの逝去を知った。

伊谷さんの病状がそれほど芳しくないことは、親しい友人から聞いていた。でも、やはりこの知らせに愕然とした。リー族における人と自然の関係について調査していたが、4人がいくつかの村に入ってそれぞれが調査していて、8月28日に集まることになっていた。このとき

はじめて伊谷さんが帰らぬ人になったことを、同僚の電子メールで知った。他の人がいるなかではひとり沈みこむわけにはいかなかった。夜になって僕は眠ることができず、ひとり部屋のなかでいったりきたりしていた。

ヒルの襲撃する森林を抜けるとそこは草地帯であった。亜熱帯でもここまできると一巡の風は爽やかだった。伊谷さんならあのヒルの森をリー族のように駆け抜けていったらと思う。リー族は確かにトウニャウをもつこともあるが、直登であろうが藪こぎであろうが、森を歩く速度が断然速い。湿った落ち葉の下から這い出てくるヒルが足にとりつく暇がない。伊谷さんもトウニャウをもたずに駆け抜けたらと思う。伊谷さんは疾駆しながら彷徨する人だった。そして風のように爽やかな人であった。

若いころから伊谷さんに憧れていた。あの未知の原野を駆け抜けながら、独創的な研究をつくりあげていく姿はまぶしかった。そしてときどき立ち止まり、あの清冽で華麗な文章を書き上げた。僕は彼の初期の作品『高崎山のサル』、アフリカの自然と人を描いた『ゴリラとピグミーの森』、そして残念なことに彼の晩年の作品ということになってしまった『森林彷徨』がとくに好きだ。それらはいずれも原野を駆け抜ける伊谷さんの姿を彷彿とさせるからである。未知の原野は、森林でありサバンナであり同時に霊長類学や生態人類学であった。自然と学問が不可分に一体となる希有な人である。

伊谷さんの学問の独創性や文体における鋭い感覚については、僕には分析する能力がない。そして原野にたつて遠くをみつめる彼の風貌や、おそらくやさしい眼差しも同行したことがないので想像するだけだ。しかし、彼の作品は人に憧憬を起させずにはおかないほど、自然と学問と彼自身が渾然一体となっている。

僕は海南島の森林や草地をとても伊谷さんのようには歩けなかった。彼のように瘦身でもなければ、何日も原野を踏破する黄金の足ももたない。彼ほど最後まで原野を駆け抜けようとした意志をもちつづけた人も少ない。僕は、伊谷さんへの憧憬を自分自身が歩き続けることで保っていくしかない。しかし、駆け抜けるのとはちがって遅くとも遠くを目指す以外にない。原野を駆け抜けた伊谷さんは、彼自身が風となって飄然とわれわれの前から自然に帰ってしまった。伊谷先生、さようなら。

合掌。

(この文章は海南島滞在中に書いたものだけど、10月7日の伊谷さんの追悼の会のおり掛谷さんがトングエのあいだでは伊谷さんが「風の旦那」と呼ばれていたことを教えてくれた。つくづく「原野を駆け抜けた風」だったのかと悲しい思いであった)

---

## 書きたくない追悼文

鈴木 継美

伊谷さんが逝ってしまわれたという。生態人類学会事務局から追悼のため、なにか書けとのご依頼で、書き始めてみたが、とても筆が進まない。この2—3年お目にかかっていなかったのだが、私の意識の中では伊谷さんは変わらずに、京都か、アフリカかは分からないが、世界のどこかで活動中である。そのうちなにかの会でひょっこりとあの温顔に出会うように思えてならない。とても追悼という気分にならない。彼が死んだということを確認したくないのが私の本心なのだろう。やれやれ、未練なことである。

もう少し時間がたって気持ちが落ち着くまで追悼文はご容赦ください。

2001. 11.2

---

## 伊谷純一郎さんを想う

偉大なるナチュラル・ヒストリアンが残してくれたもの

武田 淳  
佐賀大学農学部

日本人類学会から、また一つ巨星が墜ちた。生態人類学会にとってもかけがいのない大損失である。

伊谷さんのあまりにも急な訃報に接し、行動を共にしたさまざまな日々が脳裏をかすめた。勿論、研究会の場もあったが、ある時はフィールドの地で、ある時は伊谷さんがこよなく愛した、お爛した日本酒をくみ交わせる酒席などであった。

ここに一枚のスケッチがある。記憶にさだかではないが、京都かどこかの酒場で伊谷さんが酔狂に任せて小生を鉛筆で描いてくれたものである。そのタッチは、ヒューマニズムに富んだ芸境で知られる洋画家の父・賢蔵氏の親譲りの絵心によるものであろう。

伊谷さんが、とある日本海に面した金沢の窯で焼いてもらったという皿を二枚、お宅で見せてもらったことがある。「サギと雲と田」と多分「スズメダイ」の絵は自

ら描いたものだった。白磁に呉須の染め付けは、肥前の三川内焼（平戸焼）風に柔らかに仕上げた作品であった。サギはその日、電車の車窓から眺めたものをモチーフにしたと奥さんの伊都子さんから聞いた。魚の方はあまりにも元気よく、尾がはみ出てはいたが、生前幾度となく訪ね、愛した沖縄の地を思い浮かべていたのであろうか。

生前、伊谷さんから自分の絵皿を50枚を作りたいが、そんな窯が有田か伊万里にないかと個人的に頼まれていたのだが、その夢も果たせず、旅立たれてしまった。

アフリカの大地を踏む伊谷さんはバッグの中に芭蕉の俳句集を入れるのを忘れなかった。夢は枯れ野をかけめぐるとの如く、時にはサバンナを、時には乾燥疎開林や熱帯降雨林の原野を足早に歩き続けた。未知の自然や人との出会いを追い、サファリの魅力と醍醐味を教えてくれた伊谷さんは、まるで大地の申し子のように思われた。また「旅はヒトを強くする」とは、伊谷さんが口にした言である。それを肝に銘じ、小生もフィールドを自分の足で歩き、自然や人を自分の目で確かめ、観察する探求の旅をこれからも続けようと思う。

タンザニアでは朝早くから前日のフィールドノートの整理をする伊谷さんの姿があった。亡き原子さんや掛谷ご夫妻と一緒にトングウェ・ランドのイセンガの地をサファリした1972年8月、乾期の終わりに近い頃だった。文章の手本はヘミングウェイの短編にあるのだとよく聞かされたのも東アフリカの地であったと思う。

稚拙な小生の原稿には、丁寧に朱をいっぱい入れて逐一送り返してくれた記憶もいまだ鮮明だ。文はセンス、スマートさ、簡潔さを要求するものだ。今にしては、師の爪の垢でも煎じて呑んでおけばよかったとつくづく思うこのごろである。

見果てぬ夢をこの世にいっぱい残しながら、逝ってしまった伊谷さん。タンザニアの住民にガリ・ラ・モシ（スワヒリ語でもうもうと煙をはいて走る「汽車」の意）と噂された伊谷さんが、サバンナの風にタバコの煙をたなびかせながら歩く姿はもう見られない。

---

## 神戸学院の伊谷先生

寺嶋 秀明  
神戸学院大学

伊谷先生は1990年3月、京都大学を定年退官されたあと、神戸学院大学人文学部に着任された。神戸学院では、1990年の新学期から、それまでの教養部を人文学部



へと改組し、人間行動コースに人類学の講座をもうけたのであった。スタッフは、教養部時代からおられた松井健さん、伊谷先生と同時に着任した早木仁成さんの3人であった。2年後、松井さんが東大の東洋文化研究所に移ることになり、その後任として小生が福井から呼ばれた。1991年の秋、当時学部長であった西崎先生とお二人で、福井大学まで割愛願いに伺っていただいた。そのとき、福井の駅前の食堂にお二人で入り「べっぴん定食」というすつとんきょうな名前のメニューを食べた、というのをあとから何度も聞いた。

小生が着任した1992年の4月以来、伊谷先生、早木さん、小生というトロイカ体制が、1999年3月まで7年間つづいた。その間、教育に研究に、そしてお酒の友として、このうえなく楽しく、また意義深いおつきあいをさせていただいた。それは、つい先日のことなのだが、なにかとお昔のようにも思われる。

伊谷先生は学問ではもちろんのこと、日常生活でも頑固なまでに自分のスタイルを守っておられた。神戸学院での食生活にもその一端がうかがえる。先生は水曜日と木曜日に授業をもっており、毎週京都から通われた。水曜日の朝、新幹線で明石に来て、その晩は明石駅前のグリーンヒルホテルに泊まり、次の日の夕方、京都にお帰りになるというパターンであった。水曜日と木曜日のお昼はかならず、大学のすぐ近くの食堂で「うどん定食」というものを召し上がられた。きざんだ油あげの入ったうどんとごま塩をふった一膳のご飯という献立である。ごくたまに別ものを注文されることもあったが、95%以上は「うどん定食」であった。「先生、メニューにはいろいろありますよ」といっても、ちょっとてれたように「これがうまいんでね……」とおっしゃって、うどんをすすっておられた。

水曜日の夜は、ホテルの近くの居酒屋にいて晩餐会というのが恒例であった。伊谷先生のお気に入りの店があった。生きのいい明石の魚を食べさせるところで、四季折々の魚介を楽しんだものだが、先生は夜はほとんど食べないのを常としていた。せっかくのおいしいお刺身も二、三切れ、召し上がるだけだった。おいしい料理をながめてお酒をのむだけで満足という感じだった。ときには学生や院生も同席し、いろいろな話題に花を咲かせた。昔話も多かったが、新しく関心をもたれている問題もおおいに議論した。「マンネリ」の研究もその一つであった。マンネリは大切ですよ、というのである。マンネリを、飽きないことと言い換えれば、それはたしかに先生の生き方に通じている。

ただ、フィールドではいろいろなものをお昼も夜も召し上がられた。アフリカでは、日本では絶対飲まないというビールもけっこう召し上がった。飲むほどに楽しく、

ためになるお話を7年間も聞いたのは、たてようもなく幸運だった。

神戸学院では、大学内での勉強のほかに、沖縄人類学実習、船越山野猿観察実習などの野外実習を毎年おこなっていたが、先生はいつも楽しそうに学生とフィールドを歩いておられた。船越山では素手でおおきなアマゴを手づかみされるという特技を披露され、ニホンザルのポストにらめっこされたりした。沖縄では、なんといても1993年の西表島横断が印象に残っている。先生のお話では4~5時間で通過できるはずの山道が、日が落ちてもまだ半分くらいしか進んでいない。けっきょく、女性11人を含む総数16人が西表の山の中で野宿したのである。先生の足を自分たちの足のように勘違いしたのがわれわれの失敗であった。日が落ちてからは、アップダウンのはげしいまっくらな山道を、わずかな懐中電灯を頼りに歩いた。宿に帰れそうにもないとわかったときベソをかいていた女の子たちも、いざ野宿となると覚悟ができて、なんかキャンプ遠足のように楽しんで一夜をあかした。翌朝、全員無事に山を出たが、けが人もまったくでなかったのはたいへん幸運であった。そのときのメンバーの多くが10月7日の「お別れの会」に集まり、急遽、同窓会のようになって伊谷先生を偲んだ。

---

## 「遙かなるイブンバ」の思い出

西田 利貞

京都大学大学院理学研究科動物学教室

伊谷さんの追悼文は、『霊長類研究』（17巻2号）、『遺伝』（2002年1月号）、『モンキー』（45巻3-4号、印刷中）の三誌に書いたし、もう書かなくてもよいと思ったが、湖中さんの奨めがあったのでお引き受けした。ここには、先生が霊長類のフィールドワークをやめて、生態人類の研究に移られたときのエピソードだけ記したい。それは、先生自身が『チンパンジーの原野』に「遙かなるイブンバ」という章で紹介されているサファリのことである。

伊谷さんが最後に霊長類の野外調査をされたのは、1969年度である。私が院生の川中健二さんを連れてマハレに入っていたときだ。伊谷さんはマハレのチンパンジー研究は後進に任そうと、それ以前に決心されていたものと思われる。というのは、この年度も伊谷さんの滞在日数は1週間であり、調査できるような期間ではなかった。また、1970年に、わざわざ研究会を開いて、トン

グエの話をもとに私に命じられた。私は1965年にカソゲに入ったときから、トングエの挨拶行動や親族構造を調べ始めていた。もともと類人猿より未開民の調査をやりたかったのだし、一つは「労務管理」のためだった。もうよく覚えていないが3時間以上も話をしたかと思う。池田次郎先生も来ておられた。

伊谷さんがヒトの調査に転向された理由にはいろいろあろう。もちろん、そのきっかけは1966年にチンパンジーの餌づけができ、類人猿の仕事が一段落したことである。理由の第一は、1960年の第二回アフリカ調査のとき狩猟採集民ピグミーに会われたことであろう。第二に、京大に霊長類研究所ができ、そこで本格的にサルの研究をやれるのだから、自然人類学講座ではヒトをやらなければならない、と考えられたこと。しかも、池田先生が人類学の研究室なんだからヒトの研究をやるべきだと、しきりにおっしゃっていた。第三に、サルの研究だけでは学生がメシが食えなからう、ということ。

1971年4月、伊谷さんは新婚の掛谷誠、英子夫妻を連れてカソゲへ行かれた。私も4月に離日したが、学振のナイロビ駐在員だったので、妻と3歳の娘を連れてカソゲに入ったのは6月だった。そのときまでには、伊谷さんちは、チンパンジーの研究基地カンシアナを足場にすでに何回かサファリをされていた。

この年、伊谷さんとのサファリは2回ある。最初は掛谷君と3人で、シサガ山に登った。ついで、伊谷さんはイブンバ山への大サファリを提案された。6月末、ボートでカソゲを出て、湖岸の小村パンパに着いた。途中で一泊しルエゲレ川上流の村をベースキャンプとした。そこで集中調査をする掛谷夫妻と私の家族を残し、伊谷さんと私、そしてガイドとポーター3人計6人で内陸に向かった。イチジクの大木だけがその名残を見せる古い集落跡や、さまざまな罟を途中で見た。ガイドはテンボ（ゾウ）の道を巧妙につないで、先を急いだ。

ついに、見たことのないユーフォルビアの林が頂上を覆う乾燥したイブンバの頂上に達した。これは、かつて伊谷さんが北方グフ盆地や東方から眺めていつか登ろうと決めておられた峰ということで、たいそう感慨深そうだった。そして、南方へ道を取ると深い森に被われた美しい沼があり、ゾウやバッファローの足跡が無数にあった。ここで休憩したあと、プスグエをめざして歩いた。

それは、広大な原野にぽつんと孤立した集落であった。家屋は6軒ほどだったが、その周囲全体に太い丸太で柵をめぐらせていた。この林立した頑丈な柱は、ライオンよけなのである。この集落は、老人夫婦と2人の中年の息子、かれらの奥さんと孫たち、3人の出戻り娘とかれらの子供たちからなる大家族だった。老人と息子たち

はハンターであり、毛皮を細く切って作った紐が軒にたくさんぶら下がっていた。

伊谷さんは、トングエの素朴な物質文化の材料について事細かに訊き、狩猟採集の仕方や罟の使い方、それに鳥や昆虫の名前を尋ね、信仰についてメモを取り、植物を採集し、植生の写真を撮られた。伊谷さんの生態人類学の代表作『トングウエ 動物誌』や『タンガニイカ湖畔』には、このときの資料も貢献しているはずである。

京都の生態人類学の門出のサファリに同行させて頂いたのは、先生からの最大の贈り物の一つである。

---

## 伊谷さんのこと

西田 正規

筑波大学歴史・人類学系

大学は出たものの進む方向が見つからずにいた時、全くささいなきっかけで私は京大理学部で自然人類学研究室と出会いました。一癖ありそうな人々がたむろしている小さく古風な二階建ての研究室は、いかにも得体の知れない場所でした。その中にあっていつも白いワイシャツに地味なネクタイの伊谷さんは、どこか恥ずかし気に微笑まれる、とても気さくなボスでした。

私はこの研究室に、ぞくぞくするような謎を感じていました。詳細は分かりませんでしたが、だれもが皆、とてつもなく重要な研究に取り組んでいるようでした。野外調査における困難な、そして奇想天外な旅の話をよく聞かされたのですが、危険をも省みずにせっせと調査に出かけるからには、よほど重要な研究があるに違いない、とりあえずはそんな了解だったと思います。

この研究室ではダーウィンもローレンツやレヴィ=ストロースも遠慮なく吟味されましたし、権威に対するきわめて強い警戒の構えがありました。それなら一体誰が偉いのかと考えながらも、この研究室がますます、科学の巨人の頭でさえも平気で踏みつける無頼の研究者の巣のように思えて来たのです。

権威に対する批判精神は科学における最も重要な出発点だと思いますが、この研究室には、何のカリキュラムを準備することもなしに、それを一瞬のうちに若者たちの身体にたたき込む力がありました。そこに仕掛けがあったとすれば、自然や生命の現場にしか学ぶもの無しという、徹底した現場への傾斜だったと思います。

野山を歩く伊谷さんは、まるで風になったり鳥になったりしておられるようでした。生きている自然の現場に

溶け込み、そこに遊ぶことから全てが始まっていたのだと思います。私たちが聞かされた数々の、いかにもありそうな奇想天外な作り話は、そんな時の先生の遊び道具だったに違いありません。

30年近くを経てもなお、「えー！あの話も嘘やったんか！」と呆れて顔を見合わせるがあります。現場の匂いのプンプンする先生の作り話は、聞いている私たちがただちにその現場へと連れ出し、わくわくさせてくれました。誰もがそんな先生のお話に乗せられながら、それぞれのフィールドに出かけたのだと思います。やはり見事なフィールドワークへの誘いだったと思わずにはいられません。

どこか恥ずかし気な先生の微笑が思い出されます。今ごろはまた誰を騙していることか。

---

## 伊谷先生の優しさ

西邨 顕達

同志社大学理工学研究所

最近古い写真を整理している時数枚の写真が目にとまった。自然人類学研究室ができてまだ日が浅い1964年の秋、研究室のメンバーで一泊旅行したときに撮られたものである。最初の日は大原三千院に行き、比叡山に登り、坂本で宿坊のような宿に泊まったと記憶している。その翌朝に宿の庭で撮られた記念写真には学生の伊沢、石田、渡辺、西邨、秘書の尾崎さん（現在石田夫人）、助手の葉山さんと杉山さん、杉山夫人と生後数ヶ月のお子さん、伊谷先生ご夫妻とその息子さんの原一君（5-6歳）と樹一君（3歳くらい）が写っている（この他に参加していたのが確実なのは写真を撮影した間直之助先生である）。ところでこの写真の伊谷先生はメガネをかけておられない。念のため前日のスナップを見ると黒い縁のメガネをちゃんとかけておられる。これらの写真を見ているうちに記念写真撮影の直前に起こった出来事を思い出した。

先生のもっていたカメラを先生を息子二人で取り合いし、その結果樹一君がそれを獲得した。次に先生がそれを原一君に渡せと言ったところ樹一君が怒り、先生の顔をたたいたかひっかいたかしてメガネが地面に落ち、壊れた、というわけである。先生のメガネが壊れた時は一瞬はとした。先生が息子を怒る、と思ったからである。しかし次の瞬間には記念撮影は無事終わった。写真をあらためて見て分かったのであるが、この時実に適切にふ

るまってられる。樹一君はカメラをしっかりと抱え、先生は樹一君をその気を静めるかのように片膝を立てて背後から抱き、原一君はその隣でカメラを恨めしそうに見ながらお母さんに甘えるようにもたれ、お母さんは彼の両肩を抱いている。子供たちの気持ちはすぐ静まったらしく、記念写真のすぐ後で撮られたらしい写真ではカメラは原一君が持ち、樹一君は尾崎さんと遊んでいる。

先生は自分の子供だけでなく、他人の子供に対しても優しくかった。さらに言えばあらゆる人に優しくかった。その優しさは、行為としては瞬時に発揮されたが、後から思うと常に二つのことと結びついていた。一つは、どんな相手でもばかにしない、というより尊敬しておられること。もう一つは、相手が本当に必要としていることをしてあげること。すなわち、先生の優しさは真の愛情の現れであった。先生の優しさはどこから来ているのだろう。私は育ち、とくに幼い時のそれが大きいと思う。

私たち学生は毎年正月に伊谷家に招待された、というより押しかけた。ある正月、先生がまだ岩倉にお住まいだったが、下鴨のお家からお母様が見えてられた。小学生の原一君と樹一君はさかんにホタえていたが、先生はよほど度を越さないかぎり彼らを叱ることはなかった。私は大人どうしの会話の場がこわされることに多少いらしたが、隣にいた先生のお母さんは孫達の様子をニコニコして眺めながら私にささやかれた。「小さいときの純一郎に比べたらこんなのおとなしいものよ」。

---

## 伊谷先生と賢蔵画伯

松井 健

東京大学東洋文化研究所

京都大学御退官後、改組された神戸学院大学人文学部へ伊谷先生に来ていただいた。私としては、学部の卒業研究と大学院の四年間ご指導いただいていたが、先生とご一緒する時間が飛躍的にふえ、濃密になり、より多くのことを学ぶことができ、幸せな数年間をすごすことができた。神戸学院大学の御在任が長くなり、その後多忙をきわめられ、結果的に、御退官後の貴重な先生の時間をうばってしまったのではないかと、という自責の念から逃れられない。後任の寺嶋秀明さんがおっしゃっていたように先生も楽しんでくださったのだと思うことにして、筆を進めることにしよう。

いつも昼食などではおともしたが、夏の沖縄実習ではほとんど終日先生とすごすことができた。学生たちを交

えて飲んでいたとき、胸ポケットから愛用のボールペンをとり出して、そこにあった紙ナプキンに、女子学生の顔をサラサラとスケッチされた。私も、引き続いて画いてもらった。このスケッチは、恐ろしいほどに痛い本質をついたもので、当の女子学生は顔を引きつらせて、泣き顔になりかけたほどだった。私はというと、その後、この紙ナプキン・スケッチを額装したものの、とても普段部屋に飾る気にならずに箱にしまっている。ときにとり出して、自戒のために数秒間眺めて、また、箱に収めるのである。それほどに、容赦のない描写なのである。しかし、そのあとの伊谷先生の言葉には、驚かされた。うまいもんですねえ、昔から絵やスケッチをやっていたんですかという問いに、「親父に見せたらな、お前みたいに器用なやつは画家になれん、言われたんや。」

その後、東京に職場を移して大阪の家を新築したおりに、懇願して賢蔵画伯のスケッチをいただいた。画伯の遺作を鳥取県立美術館に寄贈されたあとで、「もう色のついたのはあれへん」とおっしゃっていたのを思い出す。南米と阿蘇のスケッチ二枚から選ぶようにとおっしゃり、私は迷わず阿蘇外輪山からみた雄大な風景を頂くことにした。後日、立派に額装してお送り下さり、それ以来、大阪の家のリビングに飾らせていただいている。それと前後して、賢蔵画伯の集められた焼き物を見せていただく機会があった。今でも、すごい備前の赤とべのものど、明の染付とは眼前に想いうかべることができる。しっかりした、きわめてシャープで個性的な眼で選ばれた優品で、絵からではうかがえない画伯の美意識の一面にふれた気がした。

画伯についての思い出話からは、先生の画伯への並々ならぬ敬愛が感じられた。画伯のもとに逗留したアナーキスト（といわれている）辻潤とその尺八の音色のこと、またそのために警察に画伯が呼び出されたことなど、いろいろとうかがった。「松井、うちの親父でもこういうもの（骨董）を集めだしたのは、60過ぎてからや。ちょっと早すぎるんちゃうか」と、40代はじめの私の古民藝趣味をいさめて下さったが、この御忠告ばかりは守れずに、もう10年もたとうとしている。